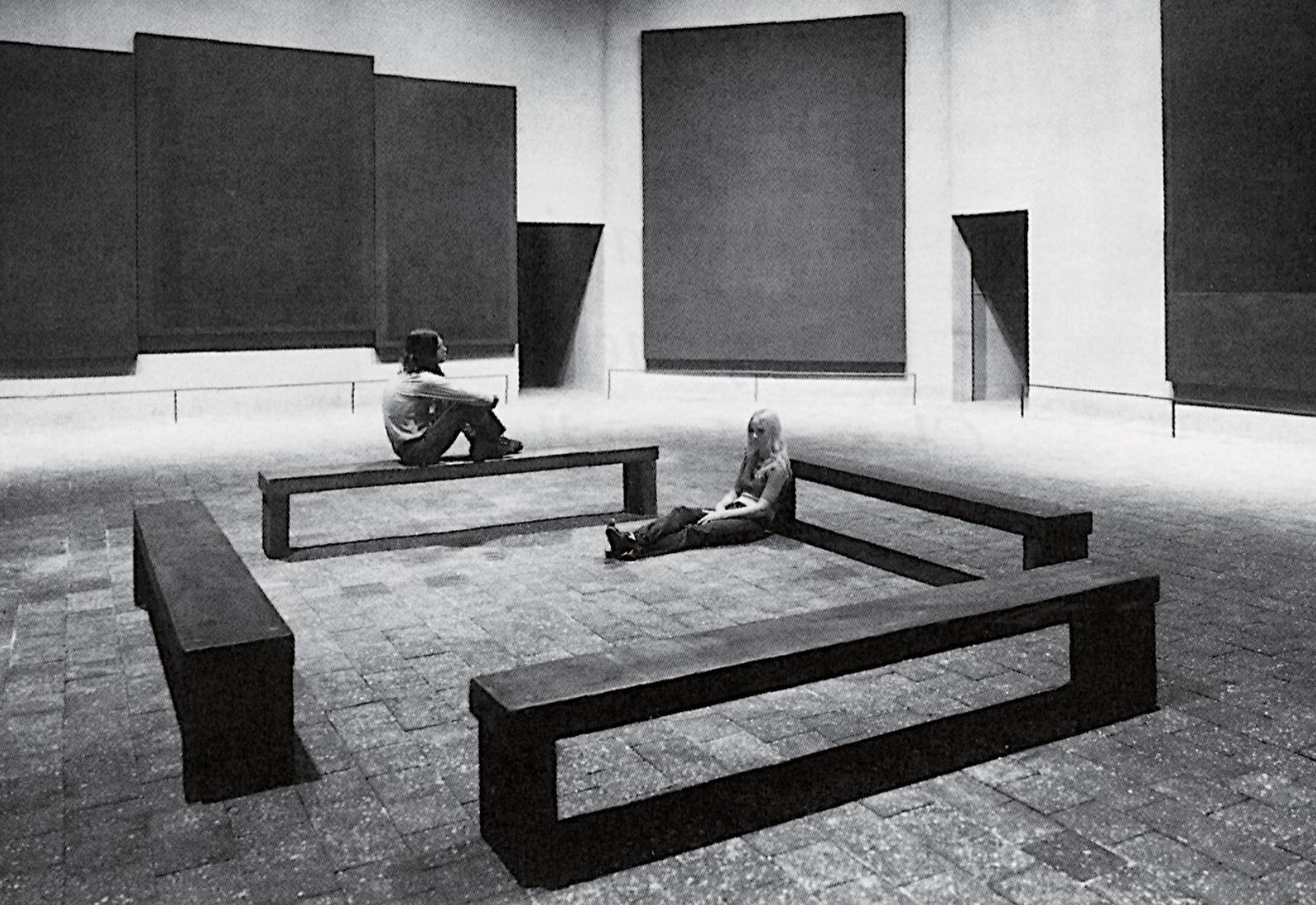


The Rothko Experience:
Attention, Distraction, Temporality



ロスコの経験 — 注意 拡散 時間性

戦後アメリカを代表する画家マーク・ロスコ (1903-70)。茫洋とした色面からなる大画面を特徴とする彼の作品は世界中で高い人気を博しており、現在、川村記念美術館 (千葉県佐倉市) でも、50年代末に制作された連作〈シーグラム壁画〉を核とする展覧会「マーク・ロスコ 瞑想する絵画」を開催中です (6月7日まで)。この展覧会に呼応する形で、気鋭の美術史家・美術評論家三名をお迎えし、ロスコ作品が生成する絵画的経験の諸相、その歴史の意味を探ります。イメージを多用した視覚的なプレゼンテーションを行います。あらかじめ上記の展覧会をご覧いただければ、いっそう理解が深まるはずです。なおこのワークショップは、本年度発足する UTCP 中期教育プログラム「イメージ研究の再構築」のイベントとしておこなわれます。

2009年5月22日(金)
18:00 — 20:00

東京大学駒場キャンパス
10号館 301会議室
(入場無料・事前登録不要)

[講師]

林道郎 (はやし・みちお) (西洋美術史・美術批評 / 上智大学教授)
田中正之 (たなか・まさゆき) (西洋近現代美術史 / 武蔵野美術大学准教授)
加治屋健司 (かじや・けんじ) (近現代美術史・美術批評史 / 広島市立大学准教授)

[司会]

近藤学 (こんどう・がく) (西洋近現代美術史 / UTCP 特任研究員)